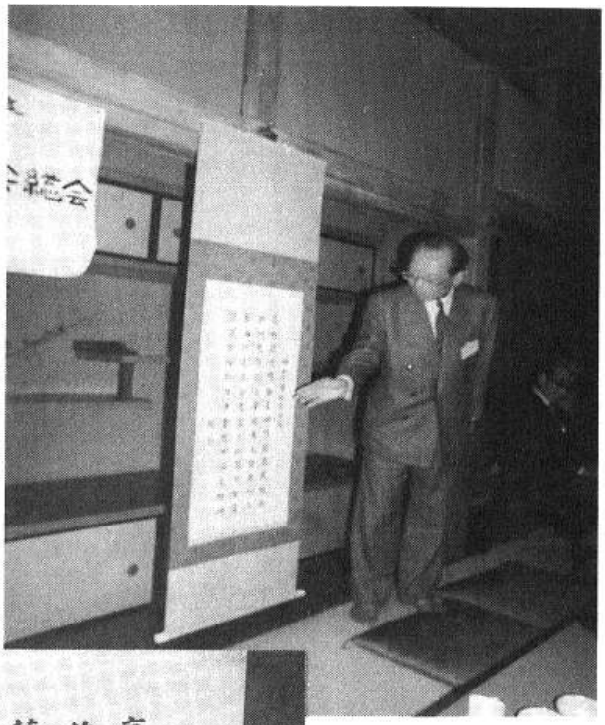
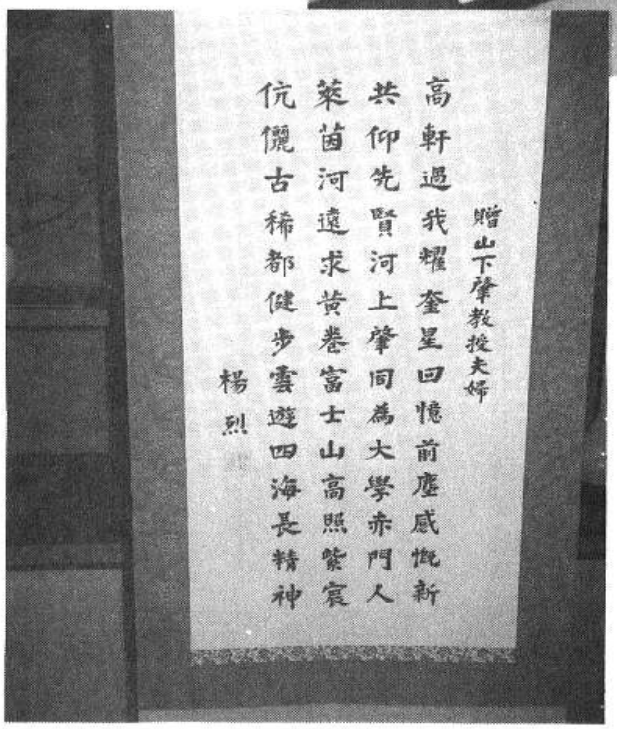
ISSN 0286−1968

河上肇記念會會報

NO. 36

1991・1・30





目次

一九九〇年度
河上肇記念会総会 ……（2）
〔講演〕河上先生と私の仕事 … 山下 肇（7）
木下尚江の遺族へ宛てた
河上肇の手紙 …… 清水 靖久（17）
『全集』以後（一〇）…… 杉原 四郎（24）
河上肇と私 …… 飯沼 辰雄（28）
記念会に参加させて頂いて … 一幡 一雄（30）
人間にとって大切なもの …… 吉田千代子（31）
会員通信 ……（34）

一九九〇年度河上肇記念会総会

一九九〇年十月二十一日（日）。関西では五週間続いた日曜日の雨、この中には二回の台風直撃もありました。今日はどうかとやや心配したのですが、朝から絶好の秋日です。

午前九時半、京都四条河原町はもうたくさんの人出。家族連れの行楽客が多く、それに地方からの観光客も目につきます。そう言えば明日は京都の三大祭のひとつである時代祭です。総会案内を差し上げると、毎年のことですが何人かの会員から宿舎が確保できないとの返事を貰います。それにいつもこの時期は宿舎代も少々アップするとか。河上肇の誕生日前後に総会を開いていますので、どうも仕方がなさそうです。

十時前に法然院の山門をくぐる、いつに変わらぬ静寂の世界。お墓へ行くと既に小嶋康生氏が来ておられ、「今、お墓の掃除が終わったところです」と。きれいに清掃されていて、それに墓前名刺受けが新しくなっている。十年以上前に故安井功氏が作られたのですが、年月の経過でかなり痛んできた。昨年から名刺の整理をお世話願っている山本正志氏に修理をお願いしていたが、それが完成した。三代目の名刺受けになりますが、これを機縁にまた新会員が増えることを期待したいと思います。

会場の準備を始めた頃からぼつぼつと参会者が来られ、受付開始。この日は法事関係が多く、御住職さんもご多忙のご様子。予定より約半時間遅れて本堂での法要。ここには両角康則氏が信州から送って下さった手作りの大きな林檎もお供えされている。全員でのお墓参りも恒例通り。今年は開会前に全員揃って記念撮影をしました。出席者総勢四十名。

十二時過ぎから細川さんの進行で総会が始まり、まず最初に杉原先生の挨拶がありました。

〔杉原〕今日は皆様方、よくお集まり下さいました。昨年はお墓参りだけで、すぐに午後は京都大学で講演会がありましたので、法然院で静かに皆様とお話することができませんでした。そういう意味では二年振りに法要を

し、またここでお食事を共にして、あと山下先生のお話を聞き、皆様とご歓談することができ、大変嬉しく思います。

いま九百人の方に毎年ご案内を差し上げております。これに対し今年も四百人のご返事が参りました。ご出席は四十人そこそこですが、案内のご返事に「是非今年はこちらへ来て山下先生のお話を聞きたかった。またこういう世界や日本の情勢の中で河上肇を思うことが非常に強い昨今である。だから皆さんとお目にかかって色々と河上のことを話し合いたいという気持ちがあるのだが、いろんな用事や体の都合で大変残念だけれど失礼する」とのお葉書が何通かありました。それを読むにつけても、河上は今も多くの方の命の中に生きているなあという気持ちを深くいたしました。

山下先生は河上肇と大変かかわりがあります。「肇」という名前も、文字まで一緒ということの上に、山と河、上と下という非常に対象的なご姓名の先生で、前からこの総会にも参加していただいておりますし、河上肇全集の月報にも河上との関係をお書きになっております。ドイツ文学の研究家で、長く東大でご講義をしておられましたが、十年前に関西大学にお越しになりました。ついに最近、NHKの連続講座でトーマス・マンのお話をなさり、御覧になった方もいらっしゃると思います。その最後に先生はディヒターとかディヒトゥンクと、ドイツ語では単なる詩人とか詩を意味しない、人生の真髄をうたいあげた詩がディヒトゥンクであり、その人の生涯が人間の運命の象徴になっているような作家がディヒターである、例えばゲーテとかトーマス・マン、そういう人こそがドイツでは詩人とよばれるのだという意味のことをおっしゃいました。それを聞きながら私はやはり河上の事を思っておりました。河上はよく文人とよばれますが、文人と詩人、あるいは文人とディヒターとではかなりのニュアンスの相違はあると思いますが、河上にもディヒターという側面があるのではないか、河上は何といっても第一義的には研究者、フォルシャーでしょうが、河上の書いたもの、あるいは河上の生涯、それらの中にドイツで言われるディヒターとよばれる人と相通じるものもあるのではないかと思います。そういう意味で今日、山下先生から、ドイツ文学の御研究と河上との繋がりというお話を、皆様と一緒にお聞きすることができることをとても嬉しく思います。どうかごゆっくり御清聴下さい。

（拍手）

〔司会〕ありがとうございました。ちょうどお昼時になりましたので、ご歓談いただきながら昼食をお召し上がり下さい。ここに来ておられる山下孝次郎さんから般若湯をいただいております。この道の通人沖本さんの話では、「英勲」という伏見の銘酒で、なかなか手に入らない珍酒だそうです。どうぞご賞味下さい。

（小一時間の昼食と歓談。銘酒の効能か、ほんのり目許の赤らむ方も。いよいよ山下先生の講演。講演内容別掲。）

〔司会〕先生、どうもありがとうございました。様々な面にわたって興味深いお話を聞かせてもらいました。何かこの際、山下先生にお聞きしたいことがございましたら、皆さんの中からよろしければどうぞ、いろいろご発言下さい。

Q　林要先生の著書の出版社はどこですか。

A　これは私家本なんです。（中略）なかなか入手困難かと思います。

Q　その朴庸坤という方は朝鮮大学校の副学長で、この方は哲学者ですね。

A　ええ、そうです。この人の焼き肉のおいしいのには本当に驚きました（笑）。

〔司会〕それでは時間のこともありますのでこの辺で。先生、どうもありがとうございました。（拍手）あとすこしばかり時間をいただきまして、今日ご参加いただいた方からちょっと自己紹介を兼ねて御挨拶をお願いしたいと思います。

（ここで山崎宗太郎・長谷川俊雄・小田正大・稲田素臣・清水靖久・飯沼辰雄・葉抱武三郎・藤木福太郎・佐田季男・佐藤直介・和田洋一・上野晃・一幡一雄・一幡利子・鈴木絢子氏等から自己紹介、その他いろいろと興味深いお話がありました。残念ながら録音不良で再録できません。）

〔司会〕それでは事務局を代表いたしまして最後に大門さんの方から一言、しめていただきたいと思います。

〔大門〕私、大門でございます。本日は山下肇先生の非常におもしろい、また昔の色々の懐かしい人の名前の出るお話をたくさん聞かせて貰いまして誠に有難うございました。今後ともよろしくお願い致します。これで丁度、お墓にあります碑のように山と川を合わせて、山川を越えて来たような記念すべき会であったと思います。

ひとつお断りしなければならない事は皆様にお送りしております会報の発行が大変遅れている事です。これはスタッフが怠けている訳ではないんですが、ちょっと荷が勝ち過ぎたのか去年、京大でやりました講演会、あの原稿、テープから起こすのが大変手間取りました。今日、ひょっとしたら間に合うかという程度にまで運んでおりますので、事務局としましては平にお許しをお願いしたいと思います。これからは出来るだけ、杉原先生の御指導の下にパンクチャルに会報を発行して行きたい。これはいつもお詫びばかりしているのですが、どうぞよろしくお願い致します。

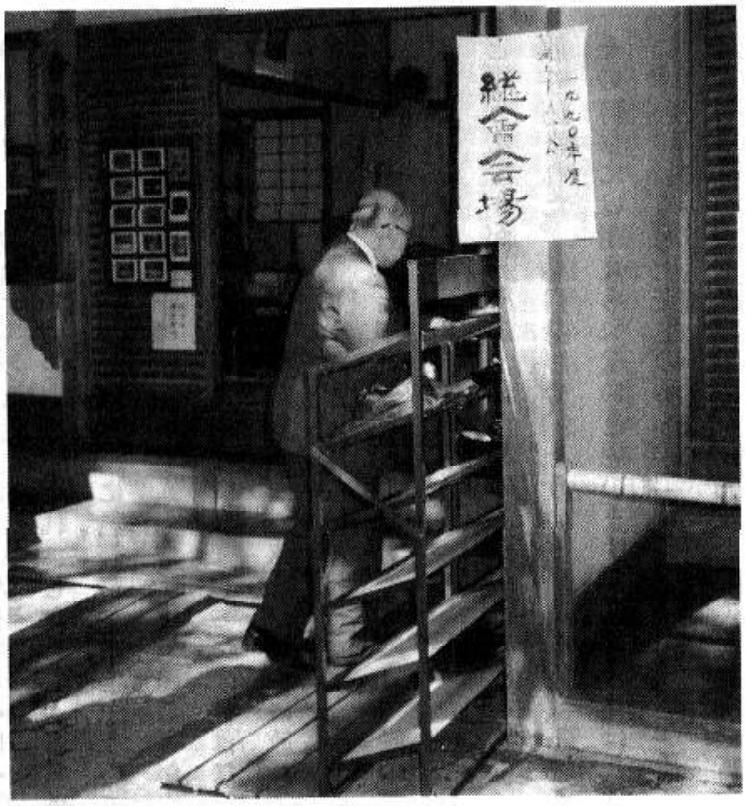
それではこれで今日の総会の日程を終わりたいと思いますが、ちょっとお時間を拝借いたしまして…。実は私、八五歳でございます。ひとつ河上先生と私の親父の話を御披露したいと思います。今年、私の弟（事務局注　記念会会員山田新三郎氏）が亡くなりまして、非常に力を落としているんです。私の弟も私も昔の京都帝国大学、私は法学部、弟は経済学部におりました。昭和四・一六事件にやられたのですが、私も弟もアカだと言うんで監獄に放り込まれました。私の家は小商売人でございまして、親父は小学校くらいしか出ていないと思いますが、教育には大変熱心でございまして、二人とも小・中・高校ともエリートの学校を出してくれました。やっと名誉ある、その時の小市民には非常に名誉だったと思うのですが、京都帝国大学の学生を二人も息子に持つことが出来た。親父としては非常に自慢にしておったのではないかと思います。その大事な息子が二人とも監獄に放り込まれた。親としてこれほど大きな打撃はなかったかと思います。昭和五年と申しますと丁度、恐慌のまっ最中でございまして、商売の方もうまくいってなかったのではと思うんですが、その上に自慢の息子が二人とも監獄に放り込まれた。私自身が今、そういう目にあえばとてもその打撃には耐えられないと思います。私の親父は非常に幸いにして河上先生の所へ、「うちの息子はどうしたんだ」という事を抗議ではないと思いますが、相談に行った。これは後で親父から聞いたのですが、長い机の端と端に座って、そして真ん中に大きい方がおられた。今から思うと真ん中で用心棒然としておられたのは大塚有章さんやないかと思います。

そこで河上先生のことですから二人の息子を誉めて下さったのでしょう。それで親父も「二人の息子は決して悪い事をしたんじゃない、これから堂々と胸を張って生

きて行こう」というふうに考えたと思います。それから少し難しい左翼の本を読み出したりしてくれました。

今から考えますと一言も我々二人の兄弟がやりました事を、牢獄に放り込まれた事については愚痴ひとつこぼさず、また転向とか説教とかそんな事は一言も言わずに親父は頑張ってくれました。もし、ってを求めて検事局や警察へ頼みに行くというような事があれば多分大門家は崩壊していたでしょう。河上先生がうちの親父に対し私達兄弟を随分誉め上げて下さったんじゃないかと思います。親父としてはそれに自信を得てやってくれました。これは大門家の崩壊を防いで下さった。うちの親父の打撃を、痛烈な打撃を防いで下さったのは我が河上肇先生である。そういう点で私は非常に河上先生に学ぶものを、私の場合は河上先生の所へ行ったのがひとつの幸せだったのですが、そういう思いを持っております。不幸にして今年の四月、弟は亡くなりました。私一人になって寂しい限りでございます。

閉会の辞が私の老人の繰り言で、私事にわたって長くなりまして誠に申し訳ございません、どうぞ許しを願いたいと思います。これをもちまして本日の会を終わりにしたいと思います。どうも有難うございました。（拍手）



暖かだった秋の陽もすこし西に傾き、会場の障子越しに吉田山がくっきりと見えます。これも山下さん差し入れの進々堂のパンを片手に全員満足そうに法然院を後にしました。どの顔も少年のように紅潮しているように私には見えました。

（総会記録の文責は今回の編集子紀平にあることをお断わりいたします。）

「河上先生と私の仕事」

山下　肇

まさか私の方にお鉢が回って来るとは夢にも思っておりませんでした。杉原先生からお電話をいただきましたのはこの夏の始めでした。私と致しましては丁度大阪暮らしが十年目になるのですが、こちらに参りましてこの法然院での会合に寄せていただくようになりましてから、もう十年になったのかの思いがひとしおでした。最初から皆様から暖かく迎えていただきまして本当に気持よくお迎えいただいた、そのことを本当に有難く思っている訳です。東京からふらりとやって来て、紛れ込んだ人間のような思いをいつも感じているのですが、この会では少しもそんな感じをさせて下さらないで、本当に仲間の一人として迎えて下さいました。有難く思っております。そんな訳で私としましては喜んで講演会に、皆様のご歓談の話題提供者という意味でお話させていただく、大体一時間ばかり、時間の許す限り、話をすればとどめがないのですが、思い出を語らせていただきます。

皆様の場合には河上とはご縁の深い方、教えをいただいた方、そんな方がたくさんおられますが、そんな方の前で私のような者が出る幕ではない。また今日は和田洋一先生のようなドイツ文学の大先輩がいらっしゃっており、そんな意味でも恐縮しております。さっきお墓の前で御住職の橋本さんが私に話して下さったのですが、御住職は大阪外大のドイツ語科をお出になった。卒業論文はクライストを私はやりましたと。家内はトーマス・マンをやっております。ですから先日の放送も二人で一生懸命聞きました。そんなお話を御住職からいただきまして大変恐縮しました。世の中は狭いと言えば狭いのですが、何か色々とご縁が深いことを折に触れて感じさせられております。それだけ私も長生きしたんだと思っているのですが。

最初に、実にお笑いなんですが、ここへ持って参りました掛け軸がございます。これは一昨年の秋に、丁度今日のような本当に、中国は上海も北京もそうなのですが、十月はいいシーズンです。三か月、上海復旦大学に関西大学の交換教授で行っておりました。その間、いろんな方と親しくなりましたが、中でこの署名があります楊烈先生と言う、もう八十近いのですが、この方が私を自宅に呼んで下さいました。戦前に東大で英文科の留学生で勉強なさった、もう日本語はしゃべる方は出来なくなっていますが万葉集と古今集の中国語訳の立派な本を出しておられる。復旦大学では世界文学史のような講義をなさっている。大変学識のある方で、東大では斎藤勇先生に学ばれたそうです。だから私のことを懐かしく思って下さったのでしょう。私が御宅へ参上しました時に、この自分で作られた漢詩を既に壁に掛けてありました。私を待ち兼ねたように迎えて下さったんです。家内と一緒に上海へ行ってたのですが、その時は私一人で、少々がっかりなさったようです。

贈山下肇教授夫婦

高軒過我耀奎星　回憶前塵感慨新
共仰先賢河上肇　同為大学赤門人
来茵河遠求黄巻　富士山高照紫宸
伉儷古稀都健歩　雲遊四海長精神

楊　烈　印

山下肇夫婦に贈る、あちらでは夫妻とは言わない、夫婦と言うらしいのです。なぜこういう物をご紹介するかと言いますと、ここに河上肇先生のお名前があるからなのです。要するに私が伺うということになりましたら楊烈先生は私の名前から真っ先に河上先生を連想なさったらしいんです。しかも日本留学中に河上肇の著書を読まれ、河上先生を通してマルクス主義・社会主義、そういうものに目を開いたという方なのです。中国ではこの世代ではこんな人が多いようです。詩は簡単に申しますと高軒、これは私の方を尊敬して言って下さっているのです。日本から遙々ここまでやって来てくれて、それでたまたま自分は昔の事を思い出して感慨が新たである。ともに仰ぐ先賢、これは河上肇先生を仰ぐと。私の名前から連想して、当然私も河上先生の弟子であるということなんです。それに大学もたまたま赤門の人となった。その次がこれは普通なかなか読めないのですがドイツのライン川なのです。つまりドイツ語を勉強している。ドイツへも行ったし、また日本では東京にいたけれど、その

富士山を越えて今度は紫宸、これは京都を指しているのですが、関西にまでやって来た。私の事を言っているのです。そして年齢もそろそろ古稀に近い。これはおとととしの事で、私は本年が古稀です。杉原先生と同じということになります。そして世界中を、中国もそうですし、世界に精神を伸ばすと言うらしいんです。そういうことで私を大変元気づけて下さっている。大変有難い詩なんです。自分の事は別としまして、ただ河上先生と私を結び付けて思い出して下さった事に私は感動しました。そんなことで今日あえてお目にかける訳です。

先程もお話ありましたが山と川と言うことで、私は生まれた時から河上先生のお名前とよく似ているもんですから、さっきお墓参りさしていただいた時も、あのたどりつきという墓碑を改めて見直しまして、なにか感無量の思いを致しました。河上先生の謦咳に触れるチャンスはありませんでしたが、しかし子供の時から何か自分と同族のような意識、そんな繋がりをずっと持ち続けてまいりました。あの戒名にも肇という名が入っているんだと改めて感じました。山と川はご存知の忠臣蔵の合い言葉で、忠臣蔵は河上先生も大好きなんですね。先生は忠臣蔵の調子で色々文章を書かれたり、あの言葉のリズム、講談もお好きだったようで、そんな文章をよく拝見します。

河上先生のものは色々読ませていただきましたが心を偽ることのない人だ、最初から無我愛を言われていますが、全く偽りのない心のままに生涯を過ごされた。本当に尊い方だと思います。全集の月報にも書かせていただきまして「新目黒里人」。「目黒里人」とは文章の中に収められている河上先生との討論があった白柳秀湖氏の筆名です。当時、白柳さんがまだ明治時代ですが東京の目黒に住んでおられた、草深い当時の目黒だったのでしょう。私は大正になりましてからその目黒に生まれましたので、これはまた縁があるなという気がしたんです。私も一人の目黒人と思いまして、新目黒里人のおしゃべりという題名にさしてもらいました。その中で私は経済学・社会科学とは縁がなかったものですから、書くこと・お話することは名前から始めるしかない、しかもその名前も「はじめ」ですから私としては身の置き所がありません。

十年前、この会に来させてもらうようになった頃、全集の編集者の米浜さんも出ておられました。そしてその席上で全集も間もまく刊行の運びである、そう報告され

ました。米浜さんは担当者として必死になって河上先生の何か文献があればと目を皿のようにしていろんなものに目を通しておられたようです。古本屋の目録があり、すると米浜さんとしては今まで聞いた事のない河上肇の文献が出ている。「ソレッ」とすぐに飛んで行った。ところがそうではなかった。古本屋の方では他意はなかった、河上先生の名にすれば値が上がる、そんなさもしい根性ではなく、つい間違えたのです。私の物で、私の方はドイツ語関係の論集なのですが、肇ということで古本屋さんが河上肇と間違えたらしいんです。それが米浜さんに迷惑を及ぼしたのです。

それ以降、総会のつど杉原先生が編集の御苦労をお話下さって、私も全集を読み始め、配本を楽しみに読み進めました。経済学という学問面では私にはとても歯が立ちませんから、どうしても野次馬的な読み方になってしまうのです。しかし学問以外の事に河上先生の文章には人間的なものが溢れに溢れています。そういうものは特に私にも響いて来ます。書簡集が出るようになり、その中で、まだお若い頃にいろんなものを書かれた。それをそのつどお父さんに報告なさるというのです。その書簡に自分は今、ペンネームを使っていると。それがなんと「山下了」にしたというのです。いや、これ私も参りました。

こちらへ参ります二年程前、生誕百年の集会がありました。思文閣で展示があり、たどりつきの拓本をいただき、早速表装しました。それに出獄直後の写真、これを先生は「とかげのひもの」みたいとおっしゃっていますが、それもいただき、これはいま研究室に飾ってあります。そんなことで血の繋がりはないんですが、本当の一族のような気持になっています。

その他にも色々ありまして、記念会から会報のお知らせがありました。西川勉君という、生誕百年の前後でしたか、NHKで「評伝・河上肇」という番組を製作したディレクターです。その西川君がその後も素晴しい仕事を続けていたんです。ところが関西の方へ来て、新大阪の駅で倒れて亡くなった。本当に若い、四十ちょっとでした。私が以前からやっております「聞けわだつみの会」へ西川君が度々やって来て私も親しくなったのです。「わだつみ会」のことに関しては末川博先生には実に色々とお世話になり、その像も立命館大学に引き取って貰ったり、資金面等でも本当にお世話になりました。そんな末川先生との思い出もあります。その西川君のテレビを

見た。これがひとつのきっかけでもあったのですが、思文閣へ行った。記念会にも入会させていただいたということです。

だからその西川君が倒れたという報告を会報で知ったのです。東京での追悼会は多くの方が来られ、さすが西川君を囲むいい知人・友人達の、実にいい会でした。奥さんや子供さんともお会いしました。その御長男がまた肇というんです。いかに西川君が河上先生を尊敬していたかが察せられます。私も同じ肇として肇君を激励して来ました。

そんなことで今日持って来ていますが「戦死やあわれ」という西川君の遺稿・追悼文集です。これは竹内浩三という、私達と同世代の戦没学生の人なんです。その人が作った詩の一節が「戦死やあわれ」です。「骨のうたう」というとてもいい詩です。西川君が竹内と同郷ということで、竹内のことをテレビ番組化しようとしていた、その途中で倒れたのです。まさに彼自身が戦死やあわれと呼んでいいような西川君を悼む詩にもなっているのです。本当にいい詩なので読ませて貰います。

骨のうたう　　竹内浩三

戦死やあわれ
兵隊の死ぬるや　あわれ
遠い他国で　ひょんと死ぬるや
だまって　だれもいないところで
ひょんと死ぬるや
ふるさとの風や
こいびとの眼や
ひょんと死ぬるや
国のため
大君のため
死んでしまうや
その心や

ああ戦死やあわれ
兵隊の死ぬるや　あわれ
こらえきれないさびしさや
国のため
大君のため
死んでしまうや
その心や

それから私のドイツ文学で申しますと私のすぐ先輩に登張正実という人がおりまして、この人とも親しくしております。この人も月報で「河上肇と登張竹風…二人の求道者」というのがございます。この人は竹風先生の息子で、その最期を看取った方です。竹風先生は山口高等学校で河上先生にドイツ語を教えた恩師なんです。河上先生が文科から法科へ進む方針をなさった時、ドイツ語の登張先生が反対なさった。その方針はよろしくないからやめろと忠告なさったという思い出があります。それ以外に二人の間はなんとなくぎくしゃくしているのですが、亡くなるまでご縁が続くのです。河上先生は盛んに文筆で活躍されるようになられた時期に竹風先生の方も活躍しておられるのです。お互いに同じ新聞の同じ面に書くような時もあったらしいです。竹風先生に対し河上先生の方がすこしからかったりなんかしたらしいんで。おもしろいですね。そんなこともありまして、河上先生は求道者である。これは誰しも認めるところですが、親父の竹風の方も求道者だったんだと息子さんが書いておるんです。これもなかなかいい文章でした。そんなことも同じドイツ文学ですから、非常に身近に感じました。

それから寿岳文章先生、この先生ともこちらへ参りましてからお知り合いになりました。寿岳先生と対話してくれと赤旗に頼まれまして、四・五回連載になりました。先生も河上先生とはご縁が深かった事は申すまでもなく、二三年前でしたかダンテの「神曲」を完訳なさり、あの高齢でよく頑張られたと尊敬しております。それに励まされた形で実は私もゲーテ「ファウスト」の翻訳を、もう十年ばかりやっているのですが、それが丁度この夏に脱稿するまでに参りました。これも私としては総決算のようなものを感じております。この十年というのは、こちらへ参り丁度今年で十年目になります。来春には関西大学も定年を迎えます。ですから今度はまた大学生協関係の仕事もあり、東京へ帰ることになるかも知れません。この生協活動でも河上先生の精神を出したいと思っております。

ファウストの場合もそうです。この夏、ドイツから劇団がやって参りましてファウストを上演してみせてくれました。それを見て思ったのですが、ファウストの中にはあの有名な「人間は努力する限り悩むものである」という言葉があります。河上先生も随分と努力に努力を重ね、迷いに迷われた面もあると思います。しかしその努力してやまない、努力する、向上心を失わない、そうい

う人間こそ救われる、というのがゲーテの言葉です。ファウストはいかにして救われるかという大変大事な問題を一生かかってゲーテは考えたのです。それはやはり河上先生の生涯にもあったのではないでしょうか。その場合、社会科学あるいはマルクス主義という問題に人間のトータルな形で生きている間はいいのですが、河上先生も出獄されてようやく刀折れ矢つきた形で新たな自分の生というものを考えるようになられた。学問を遺棄した形で今度は詩歌の道、文学の世界、そういうものに自分の心を動かして行かれた、ということがある訳です。それは私もまだ拝見していないんですが杉原先生の「芸術と人生」という本があります。文学芸術、そういうものに心惹かれた、その側面に私のような人間は河上先生に惹かれる面が多い訳です。弟の左京さんも絵書きさんということもあり、芸術にも関心の深い方です。安井曽太郎や津田青楓との交友なども私の心を惹きます。

先生の言われる「おおいなる学理は詩のごとし」、それはゲーテの場合もそうですが、河上先生はよく分かっておられた。今日もお墓をお参りしましたが、その少し向こうに九鬼周造先生のお墓があります。そこには西田幾太郎先生が亡くなられる直前に書かれたゲーテの有名な旅人の歌という詩を、自ら意訳された言葉で書いておられます。これが西田先生の亡くなられる五日前ですが、だから絶筆です。これもまた素晴しいもので、ゲーテが若い頃に山に登って、山小屋があり、そこに彫りつけたんです。ところがその詩をゲーテ自身が晩年、もう八十過ぎてからです。またその山へ登ってその山小屋を訪ねてみたら、その詩がそのまま残っていた。それを改めて読み直して実に感銘した。ゲーテ自身が涙を流したという詩です。その詩を西田先生が「ゲーテの旅人の夜のうた」という文章をお書きになって私家本で出しておられる。それをまた住谷先生の親友でもあると思うのですが林要先生が書いておられる。一昨年に出ました「忘れ得ぬ人々」で、「西田先生の絶筆」として書いておられる。お墓に刻まれている西田先生の絶筆、「見はるかす山々の頂き　梢には風も動かず　鳥も鳴かず　待てしばしやがてなれも憩わん」。ゲーテがそれに涙したというのは自分も余命いくばくもない、それをゲーテ自身が悟った。それをまた西田先生自身も余命いくばくもない、本当に五日後には亡くなられたのですから非常に思いが深いわけです。

「おおいなる学理は詩のごとし」という言葉、林先生

がまた「津田青楓と河上肇」という文章で、この著書に書いておられます。先生は東京でまだお元気なのですが、九五歳か九六歳におなりです。「もう最近では記憶喪失になってしまった、だからもう来なくていい、来てもだめだ、来てもお前であるかどうか分からん」と私におっしゃるのです。その「忘れ得ぬ人々」には様々な交友が貴重な文章となって集められています。

もう時間がなくなりましたから最後にひとつだけ紹介させていただきます。河上肇と難波大助の事です。難波大助の大逆事件の事です。河上先生は岩国の方ですが、難波大助も山口の出です。そして林先生も山口の人です。そして林先生と難波大助の家はすぐ近くなのです。それから河上先生の奥様の方でしたか、難波の家と親戚なのです。そして難波大助は大逆事件の直前に河上先生の所を訪ねて行って、旅費を貸してくれと申し入れたということがあるのです。その時、たまたま小島祐馬先生が同席されていて「これはちょっとやめた方がいいのではないか」とおっしゃったので、そういうことになった。あとで河上先生は「難波大助は大変立派な人物である」と書いておられます。それが林先生の本にも入っております。驚きますことは難波大助という人は最後の最後まで拷問にも耐え、絶対に転向しなかった。その貫き通した立派さはたいしたものです。この事を林先生は感動的に書いておられます。またあの当時の官憲がいかに難波大助に震え上がったかということがよくわかります。そのことを河上先生は獄中におられて聞かれた。たまたま同じ刑務所に収容されていた囚人、彼は難波大助の刑の執行に立会った男なのですが、彼からその様子を詳しく聞かれ、大変感動した。その感動を書いておられるのです。この文にも私は感動しました。

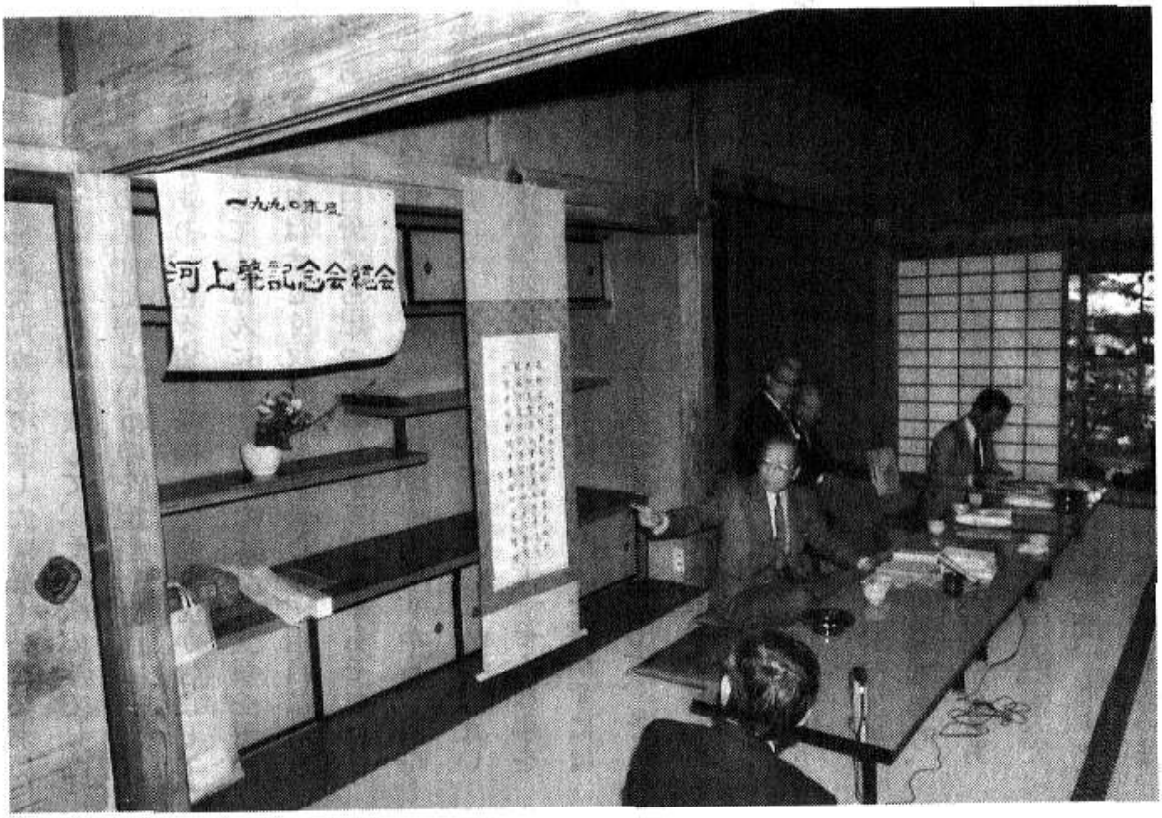
こんな事が「忘れ得ぬ人々」に色々書かれているのですが、林先生はもう御高齢で自分では本に出来ない、それでお弟子さんが一生懸命まとめた本です。そのお弟子さんは私も知っているものですからちょっとご紹介致します。朴庸坤さんという東京の朝鮮大学校の副学長です。この人が愛知大学におられた林先生の学生・助手だったのです。私もお宅に伺った事があるのですが、実に素晴しい焼き肉を御馳走してくれました。そのお人柄がそれ以上に素晴しい人です。

そんなお話をしているときりがありませんので最後に一言、国家機密法の問題が世間を騒がせていた頃、それがこの総会でも話題になりました。皆様が口々に危険で

あると申しておられた時がありました。私も皆様のお気持がよく分かるような気がしまして、その次の年でしたか、朝日新聞の誌面批評というのを担当していました。そこで魂胆があり、色々資料を揃え、時間をかけまして国家機密法をこてんぱんにやっつけたような文章を書いたのです。それはすごく反響がありまして、相当に効き目があったと自分でも思っております。しかもそれは私も色々の手を使いまして、朝日新聞の上ですから、当時の衆議院の議長が私の独文科の同級生だった、年はだいぶん上なのですが警視総監も私の教え子で、そんな事を書きまして、私は自分としてはこういう事を書かずにはいられないのは、今そういう人達を目の前にして、そういう縁もあるから書かずにはいられないんだと。終わりにちょっと私の逃げ口でもあるのですが自民党の色んな騒さ方がおりまして、そういうのを押さえられると思って書いておきました。

今年はどうかと言うと既に自衛隊派遣の問題もあり、大嘗祭の問題もある。大嘗祭の問題の方は意見広告もありまして、それには私も名前を連ねておきました。ただ私が最後に申し上げたいと思ったのは、この間、トーマス・マンをやりまして、その放送を自分でも聞いてみまして、ひとつ反省した訳です。それはトーマス・マンという作家は教養の問題とか、知識人・ヨーロッパ人・市民社会・市民的自由の問題とか、そんな色んな事を語ったのですが、そんな事が一方には大正のオールドリベラリストというのがあります。それは河上先生も批判なさったような和辻哲郎その他の教養人・大学教授ですね、そういう人達、それから戦争中で言えばいわゆる京都学派と言われる大東亜共栄圏の哲学者があります。それがまた今日、教養人と言う事で、ひとつの流れがあって、又そういう流れが時代に迎合した形で、学者として問われるような時期に来ている訳です。私としては河上先生が批判なさったようなオールドリベラリストであったり、あのトーマス・マンの講演の中で私もまたそういう一派だと見られたらかなわない、という事を反省したのです。ひょっとするとそういうふうに受け取りかねない人もいるかも知れない。私自身のこれからの生き方としては、そういう所とははっきりと一線を劃して河上先生のあの真紅の紅潮の流れがやはり綿々と生きているんだ。

私もその一人として生き続けるんであって、決して時代に迎合する連中とはひとつにならないんだという事を、その辺を私もこの機会に皆様と思いを新たにして、自分



も一層の前進を考えたいと思っている次第であります。

最後に申し上げたかったのは何か普通の知識人・教養人・大学の先生とか、そういう形でオールドリベラリスト的に一般的に見られては私も心外だということ、又そう見られかねない時代の情勢でもあるんだが、自分でも反省しなければならない、というような事を思いました。今日のお話もそういう事のひとつの繋がりとして聞いていただけたらと思っている次第です。時間ももう三時を過ぎましたから、この辺で失礼致します。（拍手）

（これは一九九〇年十月二一日、京都法然院で行なわれた河上肇記念会総会での講演を事務局の責任で編集したものです。素人がテープを起こしましたので一部錯誤や脱漏もあると思います。御容赦下さい。）

木下尚江の遺族へ宛てた河上肇の手紙

清水靖久

木下尚江（一八六九―一九三七年）は、青年期の河上肇に極めて強い影響を及ぼした。そのことは、晩年の河上があの宗教的体験の記録「大死一番」を著したとき、「木下尚江氏に関しては、私は別に纏めて自分の思ひ出を書きたいと思ふから、ここには委細を略する。ただ私は、木下尚江氏などと書くのは自分の気分に副はず、木下翁とか木下先生とか書きたい気持を有つてゐることだけを、ここに書き加へておく」と記し、実際に「木下尚江翁」と題する文章を著したことからも窺われる。もっとも河上は、木下とは大学生のとき数回会っただけで、ついに再会することがなかった。そして三十数年後、思いがけず木下の訃報に接してから、子息木下正造氏ら遺族へ宛てておそらく三通の手紙を送っている。このたび『木下尚江全集』（全二十巻、教文館発行）の編集作業のなかでそのうち二通が見つかったので、ここに紹介したい。まず全文を掲げたうえで、解説を施す。表記は、旧字体を新字体に、変体仮名を通用の仮名に改めたほかは原文のままである。

昭和十二年十二月十八日付の封書

〔封筒表〕　市内瀧野川区西ケ原六九
　　木下正造様　御直披

〔封筒裏〕　市内杉並区天沼一ノ二二九　河上肇

〔消　印〕　荻窪　12・12・20　前0～8

拝啓　今回ハ故翁を偲びまつるに此の上も無き、洵に得難き記念の御品々を小生へまで御恵投なし下され、大なる喜びを以て拝受、厚く御礼申上げます。

此の前の手紙で申上げました故翁のお手紙ハ、その後「改造」に掲載されたのを御覧になつた事と存じます。私ハ今あのお手紙の事について、もつと申上げて置きた

いと存じます。あのお手紙ハ私が獄中に居る頃、人が私の近親の者に見せて呉れたのださうでして、その折近親の者がそれを写し取つて置きました。私ハ去る六月の中旬に出獄してから初めて其の写しを見る事が出来たのですが、冬になつてから私ハまたその一部分——私に関係のある部分を自分の帳面に写し替へました。今ハそれが何日の事であつたか明確にし得ませんが、少くとも十月二十二日以後、十一月三日以前であつた事だけは確かめることが出来ました。当時私ハ先生の御文章を写し取りながら、「今一度胸襟を開いて語つて見た〔い〕と願つてゐます」と仰しやつて居られるのを重ねて拝見して、頻りに先生を懐かしく思ひました。私ハ特殊の犯罪を犯して来た人間ですから、時節柄遠慮して閉居の状態を続けて居ますので、お伺することは出来難いが、せめてお手紙でも差上げたいと頻りに思ひました。しかし私ハ先生の御住所を確かめる事ができませんでした。森戸辰男氏に問合せば分かると思ひましたが、同氏は昔からの知人ではあり乍ら出獄後も同氏からお便りが来ず、私の方から進んで手紙を出す事もどうであらうかと遠慮しましたので、たうとうそのままに打過ぎて居ると、洵に思ひ掛けもなく先生御永眠の報を新聞紙で見ましたので、私ハ実に残念に思ひました。今でもそれが残念でなりませぬ。あのお手紙を見て、私ハ先生が私のことを永く記憶してゐて下さつた事を、実に感謝いたします。私ハ明治三十一年に山口の高等学校から東京帝国大学へ進学した者ですが、山口県ハ藩閥の根拠地であり、東大の法科ハ穂積八束博士の憲法論の宣伝本拠でありましたから、神田の青年会館で初めて先生の演説を拝聴した折ハ全く驚いたものであり、殊に聴衆が誰あつて非難の声を発する者なく拍手を以て歓喜してゐるのを見て、実に意外に感じたものでありますが、それ以来私ハ何遍先生の演説を聴いたか知れません。そして恐らく大学の先生達から受けた感化よりももつと深い大きな影響を先生から受けたのでありませう。さうした私が初めて先生を沖猿楽町のお宅へ伺つた時の事ハ、先生もお手紙の中にお書きになつて居ますが、私も今尚ほ極めて明瞭に当時の印象を憶えて居ります。私が通された部屋ハ多分お居間であつたらうと思ひます。狭いおうちでしたから、別に応接室は無かつたのでせう。私の坐つてゐる側に箪笥があつて、箪笥の上にハ円いガラスの金魚鉢が置いてあつて、それに数尾の金魚が入れられて居ました。私ハ先生が動物をこんな窮屈な目に逢はして居られるのを一寸不思議に感

じました。その感じが今でもはつきり残つて居ります。こんな思ひ出を先生の御生前に申上げたら、病床でお笑ひになつたらうにと、残念に思ひます。

それから序に書き添へておきますが、先生のお手紙の終りの方に、私の写真の事をお書きになつてゐる所は、私の方の写しでハ

兵子帯をだらりと結び下げた背の高い痩せほうけた男の見すぼらしい後姿

となつて居ますが、「改造」の方でハ、何でも

背の高い疲れた男の……

と云つた風の言葉になつてゐたと思ひますが、あれは多分私の写しが正しいのでありませう。後日全集でもお出しになる折の御参考にもと、序に申上げておく次第であります。晩年のお写真ハ、私達が若い頃に壇上に拝した御姿と、まるでお変りになつて居ります。私共三十余年を距てて近頃途中でお目にかかつたのでハ、とても先生と気付かなかつた事だらうと思はれます。

図らず記念の御品々を賜りし御好意に甘へ、思ひ浮ぶがまゝの事を申上げました。失礼の段ハお許し下さい。

終に臨み、謹んで

先生の御霊前に敬慕の誠を致します。頓首再拝。

昭和十二年十二月十八日　　河上　肇

木下正造様侍史

昭和十三年十一月十八日の葉書

〔葉書表〕　市内瀧埜川区西ケ原六九　木下正造様方

伊藤正治様

〔消　印〕　中野　13・11・18　后0～4

故尚江先生御一週忌記念之御冊子　私にまで御恵投を辱う致し難有拝受いたしました。

乍略儀右御礼まで　不具。

中埜区氷川町三七（転居）

河上　肇　拝

解説

河上肇が木下尚江と出会ったのは、明治三十年代のことである。明治三十一年九月に東京帝国大学に入った河上は、翌年二月に毎日新聞記者となった木下の演説をしばしば聴きにいくようになった。そのことについては「木下尚江翁」（昭和十七年脱稿）のなかでも、「演壇の上で見た氏は痩せて居られた。私は度々氏の演説を聴い

たが、一度もその洋服姿を見たことがない。いつも粗末な着物に袴をつけて居られた。私は氏の口から、今まで嘗て聞いたこともないやうな熱烈な調子の演説を聞いた。私が今でも尚ほはつきりと記憶して居るのは、その天皇神権論に対する攻撃の露骨さであつた。〔中略〕おかげで私の眼界は開けた。恐らくこの時から私の心にデモクラシーの思想が芽生えそめたであらう」と回想されている。　木下も河上も、教会に通うことはなかったが、キリスト教の影響を強く受けていた。木下は、いわばキリスト教社会主義者として、普通選挙運動や廃娼運動や星亨告発などで活躍していたし、社会民主党の創立にも参画した。河上は、新約聖書から絶対的非利己主義の至上命令を受取り、自己の利己心に直面して煩悶していた。そして足尾鉱毒問題が、木下と河上とを出会わせた。

明治三十四年十二月二十日、河上は、足尾鉱毒問題の演説会で「なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな」という内心の声を聞き、その場で外套その他を脱いで被害民に寄付し、翌朝には身につけている以外の衣類を残らず救済会の事務所へ送り届けた。河上のこの特異な寄付行動は、それに立会った木下に強い印象を残した。二十三日の毎日新聞は、「特志の大学生」と題してこの事件を報じている。なお河上は、足尾鉱毒問題を叫んだ田中正造の演説をそれまで何度か聴いて心服していたし、渡良瀬川沿岸の鉱毒地を視察してもいる（米浜泰英「河上肇資料整理余話」、本会報第二十五号）。その視察が明治三十四年十二月二十七日か翌年一月二十六日かの学生鉱毒地視察に参加したものだとすれば、両日とも木下が学生を引率していたから、そのとき河上は木下と話す機会があったと思われる。

明治三十五年、河上は、七月に大学を卒業する前、新聞記者を志望して木下の家を訪ねた。そのとき金魚が窮屈な金魚鉢に入れられているのに異和感を覚えたことは、右に掲げた木下正造氏宛の封書のなかでも回想されているし、「木下尚江翁」のなかではその異和感が当時の河上自身の「清教徒的傾向」に帰せられている。もっとも明治三十八年末の「社会主義評論」のなかでは、「木下尚江氏を猿楽町の氏の寓居（頗る狭かりしは余の最も感動したる処なりき）を訪ね、毎日新聞社に入らんことを求め、略ぼ氏の同意を得たるも、主筆島田氏の為めに体よく断られたり（氏の邸宅が慈善に同情する氏にとりて、立派なるに驚きたりき）」と回想されており、木下の家が島田三郎の家と違ってとても狭かったことが河上の清

教徒的な感動を呼んだようである。なお、河上が木下の尽力にもかかわらず新聞記者志望を断念したのは、昭和十一年の木下の森戸辰男宛書翰によれば「河上君の方にも大阪の叔父さんの異議があつた」からだというが、やはりそれよりも島田三郎に断られた（その前には黒岩涙香や徳富蘇峰にも断られている）ことが大きかったのだろう。

その後二人は再開することがなかった。河上は、結局大学院に入って経済学者への道を歩んでいく。明治三十八年末にすべてを捨てて無我苑に入るという波乱があったが、その後京都帝国大学の経済学教授となり、社会問題と学問的に取組んでいった。木下は、それからも社会主義運動を続け、日露戦争時には非戦論を叫び、小説も書くなど縦横無尽の活躍をした。しかしついに明治三十九年に社会主義運動を離れ、その後静坐にふけって沈黙を守るようになった。大正昭和期の木下の軌跡は、河上がいかにも学者的な真理探求の結果マルクス主義に辿りつき、大学を逐われ、やむにやまれず社会運動に跳び込んだのとは著しく隔たっている。しかし木下は木下で、天皇崇拝や軍部の横暴が強められていく軍国時代の現実を憂慮しながら黙ってみつめていた（清水靖久「木下尚江の沈黙」、『思想』第七七二号参照）。

昭和八年、木下は、二十数年間の沈黙を破って文章を著し、もう一度非戦論を唱えようとした。そのように木下を促したのは、一つには、前年八月以来地下に潜伏していた河上がついに逮捕されたことだった。木下は、昭和十一年の森戸辰男宛書翰のなかで、河上が護送された昭和八年一月二十七日のことを回想して、「あれは何時でしたか、私が山の手線の電車で帰つて来る時、隣の人の拡げてゐる夕刊新聞をみますと、其処に大きな写真が出て居る、兵子帯をダラリと結び下げた背の高い痩せほうけた男の見すぼらしい後姿――私は三十年代の自分の写真ではないかと不図胸を踊らせました。其れが河上君だ、警視庁から何処かへ送られる写真だ――私は何故とも知らず、熱涙を雨の如くに落しました」と述べている。おそらくその涙が乾かないうちに筆をとったのだろう、数日後に最初の文章を朝日新聞記者に託し、それから幸徳秋水や田中正造らを回想する文章を次々と発表している。河上肇については、文章のなかでは触れていないが、昭和九年の六月三日および七月九日、足尾鉱毒問題を回想する二度の講演のなかで明治三十四年末のあの寄付行動について語り、八月十八日の白柳秀湖宛書翰のなかで

は「本郷春木町の中央会堂に於ける演説会では、青年河上肇君に洗礼を与えた」と記している。

昭和十一年七月二十四日、木下は、「尚江と情熱」という文章を発表した未知の森戸辰男に宛てて書翰を認め、明治三十年代の社会運動を回想したのち、明治三十四、五年の河上との出会いを描いている。そのなかで河上の寄付行動について「十二月十日田中正造翁の身を捨てた『直訴』と云ふ背後には斯うした光明があつたのです」と語り、明治三十五年以後について「私は其れつきり河上君には遇ひませんが、何彼につけて河上君を思ひます」、「河上君とは今一度胸襟を開いて語って見たいと願って居ます」と告げている。この書翰は、木下がおそらくあえてだれかに託したので、数か月後に森戸辰男の手許に届くまでに方々を転々とし、河上の次女の夫鈴木重歳が筆写するところとなった。

昭和十二年六月十五日、四年半ぶりに出獄した河上は、早速木下の森戸辰男宛書翰の写しを見て懐しく思い、ぜひ木下に会いたい、せめて手紙を出したいと考えたが、果たせなかった。当時木下は、社会的活動を再開する決意で「島田三郎伝」を執筆していたが、やがて病床に臥し、十一月五日に世を去った。翌六日の河上の日記には、「朝新聞を見て木下尚江氏逝去の報を見て残念に思ふ。つい数日前同氏の書翰を獄中記の中へ写し取り、『今度は胸襟を開いて同君と語りたいと願ってゐる』という河上追憶の一文の結語を見て、せめて一書を呈したいと思ひ乍ら住所不明のため其の意を果さざる中に、急に同氏の永眠を聞く。遺憾甚だ大なり。乃ち一書を認めて遺子正造氏に宛て追悼の意を表す」と記されている。その日の河上の書翰はまだみつかっていない。

木下の死後、雑誌『日本評論』には、木下の遺稿「島田三郎伝」が連載されはじめた。河上は、十二月十一日の日記にそのなかの一節を書きとめている。また十二月には、木下の森戸辰男宛書翰が「帝国大学と私」と題して雑誌『改造』に掲載された。そして木下の闘病の記録『病中吟』が関係者に配られた。

河上は、十二月十六日の日記によれば、木下正造氏から『病中吟』および写真、筆蹟などを受取っている。右に紹介した昭和十二年十二月十八日の封書は、その「記念の御品々」に対する礼状であり、『改造』に掲載された森戸辰男宛の「故翁のお手紙」について述べたものである。そのなかで昭和八年一月護送中の河上の写真を木下が描写した言葉について、『改造』誌上の「疲れた男」

よりも、河上の写しの「痩せほうけた男」の方が正しいだろうと述べているのは、木下が明治三十年代の自分の写真ではないかとふと胸を踊らせたその男は、河上の思い出のなかにある演壇の上の木下のように痩せていなければならなかったからでもあっただろう。河上がそのことを指摘したのは「後日全集でもお出しになる折の御参考」にもと考えたからだが、河上が当然出ると思っていた『木下尚江全集』は、その後たびたび企てられたが実現せず、今年に至ってようやく刊行されはじめた。

昭和十三年十一月、木下の遺族は、木下が糟谷磯丸の短歌をかつて編集した冊子『磯菜かご』を一周忌に当たって配布した。右に紹介した昭和十三年十一月十八日の葉書は、それに対する礼状である。宛先の伊藤正治は、木下尚江の娘純枝の夫である。

昭和十七年、河上は、「大死一番」を十月に脱稿し、「木下尚江翁」を続けて脱稿した。『自叙伝』に収められているその文章については、ここで述べるまでもない。脱稿直後の十一月二十四日、日記に次のように記したように、河上は、若い日にしばし相見た木下の思い出を永遠に消さないで大切に残していた。

○拙稿「木下尚江翁」を書き了へて

あひみしはたまゆらやどるつゆにてとはにけのこるひとのおもひで

わかき日の思ひ出いだき訪はまくと思ひゐし日に君みまかれり

○

杉原四郎世話人代表の古稀の祝い

杉原四郎世話人代表（元甲南大学長）の古稀の祝いが、このほど（九〇年五月一四日）大阪市内のホテルでありました。関西大学、甲南大学の教え子達が発起人となり催されたもので、学会関係者を中心に多数が参加、おおにぎわいでした。

河上肇記念会から一海知義、細川元雄らがお祝いにかけつけました。会を代表して一海世話人がお祝いのスピーチをユーモアたっぷりにやって、杉原先生を励ました。

杉原先生は古稀を機に数多くの公職からリタイアされましたが、河上肇記念会だけは世話人代表として頑張っていただいています。執筆活動も再開され、たて続けに六冊の本を上梓されました。その一つ『読書流紋』では河上肇のことが数多く書かれてあります。

（小嶋　記）

『全集』以後（一〇）

杉原四郎

一

私はこの連載で毎回『全集』完結以後に知りえた河上肇自身の書いた新資料を紹介してきた。今回の会報では、清水靖久氏によって河上の木下尚江あて書簡が紹介されているが、ここではそれ以外にとりあげるべき新資料はない。それですでに知られており、『全集』第四巻でその所在が言及されている河上の雑誌論文について、補足的な説明を加えておきたい。

河上が新聞や雑誌に発表した文章が、その後別の場所にそのまま転載されることがよくある。おそらく多くの場合、ある所から寄稿を求められたが新稿を用意することができず、やむなく旧稿で間に合わせることになったのであろう。したがって新載されたものはほとんど全く旧稿のままで、実質的な加筆がされることはない。『全集』ではこの場合初出の文章を採録し、それが後どこに転載されたのかも注記するにとどめている。ここでとりあげる「経済学者無用論及び其の批評」（『日本経済新誌』第一巻第四号および第五号、明治四〇年五月一八日、六月三日）もその一つであって、『全集』第四巻には『日本経済新誌』の文章で採録され、編者によって「この論説は明治大学内明治学会発行の月刊誌『明治学報』115号、明治41年6月8日、三―一三頁へ転載された」と注記されている。明治41年というのは40年の誤植である。

私は最近この『明治学報』を入手し、『全集』収所の文章と対比しつつ読んで見た。以下はその際の若干の感想である。

『明治学報』は明治三二年創刊されたもので、『慶応義塾学報』や『早稲田学報』や『法学新報』（中央大学）など、当時東京の私立大学が出していた同種の雑誌の一

つであった。この第一一五号は一七六ページ、定価一二銭である。論説、質疑、資料、海外通信、叢議、離俎、録事、時報、判例の九項にわかれ、その内容からみて、本誌の主な読者が明治大学の法科と文科の学生であることがわかる。全体の約八割が法律関係の文章、経済学に関するのは河上のものだけで、それは論説の項に、法学博士清水澄と文学博士藤岡作太郎のものとともに掲載されている。河上の肩書は法学士となっている。

『明治学報』に河上が書いたのは、これがただ一つだけであるが、『学報』には、河上のこの文章が元来『日本経済新誌』にのったものであるということも、それがどうしてここに転載されたかということについても、何も書かれていない。そこであるいは当時河上が明治大学の非常勤講師として経済学の講義をしていたのではないかとも考えられる。彼は明治三八年末に無我苑に入るのを機に、それまで出講していた五つの学校の講師をすべてやめた。明治四〇年四月に『日本経済新誌』を創刊し、その主筆の仕事をしていた河上にとって、神田の明治大学へ出講することは、強い要請があれば不可能ではなかったと思われる。しかしその確証を私はもっていないから、あくまで推測の域にとどまる。かりに河上が明大に出講していたとしても、明治四一年八月には京都へ転居するのだから、その期間はごく短くて終ったはずである。

河上と明大との関係はともかく、彼が自分の数ある文章の中からとくにこの経済学者無用論をえらんで『明治学報』に転載したのは、この文章に愛着があり、より広い読者をえたいという希望によるものだと思われる。この論説は、経済学を無用の長物とおとしめる実業者たちの批判から経済学を擁護する一方、現在の経済学に対する河上の不満をのべて、「日本の実状に就いて大に歴史的事実的研究を遂げ、以て『日本経済学』を建設する」ことによって経済学の空論の弊を救うべしという持論を展開しており、経済学者河上の基本的問題意識をしめすものである。ここでのべられている学校の経済学カリキュラムの改正案が大正八年に創立された京大経済学部で河上によってある程度実現されたことを思い合わせても、この論説の重要性はわかるであろう。

『日本経済新誌』所載のものによった『全集』第四巻の文章と『明治学報』所載のものとをくらべると、つぎの点でちがっている。(1) 各節の見出しが『新誌』では㈠経済学者と実際家、㈡国民経済学と個人経済学、㈢学理と実際、㈣個人主義の経済学を倒すべし、㈤空論

を排して実際に近くべし、(六)経済学者は私心より遠かるべし、とあるのに、『学報』では、(一)(二)(三)は同様だが、(四)個人主義の経済学、(五)空論と実際、(六)経済学者と私心、という風に改められている。(2)(三)の末尾の文章と(四)の冒頭の文章とは『新誌』では二号にわたる連載となっていることをおもんばかる叙述になっているのに、『学報』では連続しているので、文章上の加筆がされている。(3)(四)の中に「(本誌第四号松崎博士論文参照)」とあるが、その部分が『学報』ではけずられている。以上の諸点はいずれも内容上の変更というよりも転載に際して形式をととのえるために生じたものだから、あえて一一注記するまでもない異同である。

二

「『全集』以後」の目的は、河上肇の手になる新資料の紹介とともに、河上について書かれた種々の文章のうちで注目すべきものをとりあげることであった。これまでも折りにふれて、興味ふかい河上論をとりあげてきたが、ここでは林要氏のものを紹介することにしよう。

林氏には、『おのれ、あの人、この人』(法政大学出版局、一九七〇年)というエッセー集があるが、『忘れ得ぬ人々』(発行者林文也、製作岩波ブックサービスセンター、一九八七年、定価二〇〇〇円)はそれにつづくエッセー集である。私はそれが出ていることを山下肇氏に教えていただき、編者の朴庸坤氏の御好意で入手することができた。

林氏は学者や藝術家の書画を多数所蔵しておられるが、その中には河上肇のものもすくなくない。氏は河上と同郷の山口県出身で、『貧乏物語』から思想的に影響をうけ、大原社会問題研究所の所員や同志社大学の教員だった頃は、河上と個人的な直接間接の接触もあったから、その名前は河上の書簡集や日記にしばしば登場するほどで、氏が河上の書画を多く所蔵しておられるのも当然である。それらは先年京都で開かれた遺品展にも、東京であった生誕百年記念の展示会にも出品され、私も参観した。『おのれ・あの人・この人』にはその写真がいくつかおさめられていたと思うが、『忘れ得ぬ人々』にはそうした写真はない。だが河上についての文章として、(一)「『大いなる学理は詩の如し』――津田青楓と河上肇――」、(二)「河上肇と難波大助の大逆事件」、(三)「河上さんを叱った柳瀬くんと私」の三つが収められている。

(一)は「すべての学者は文学者なり。大いなる学理は

詩の如し」という河上の言葉で櫛田民蔵が学者になる決意をした次第が書かれている。㈡は河上肇が『自叙伝』の中で彼との関係を書いている難波大助――彼は徳山中学での林氏の後輩である――が虎の門で大逆事件をおこすまでの経過を彼の友人への書簡によってくわしく紹介している。㈢は「人民の画家」柳瀬正夢が小菅の刑務所で、独房から呼び出されてよぼよぼ廊下をゆく男に――それが河上肇であるとは知らずに――「しっかりしろッ」と怒鳴ったという話を本人から直接きいたとのべている。

この三つの文章は櫛田や難波や柳瀬のことが主で、河上はいずれも脇役としてしか登場しないという意味では、河上論としては物足りない。しかし本書には、河上にゆかりの深い人々、たとえば有島武郎や西田幾太郎や住谷悦治や長谷部文雄らを語る文章がふくまれており、その中には随所に河上肇のことが出てきて、注目させられることがある。河上から林氏への手紙「…いつか老生の筆蹟御所望の栄を蒙りました…」（一九四一年三月四日付）の「いつか」とは長谷部文雄の荻窪の家での碁会のときのことである（四七ページ）とか、「鶴のごとく痩せ衰えてベッドに横わっていた河上が『わたしの講義をきいたものは二万人に及ぼうが、いま病床を訪ねてくれるものは二、三にとどまる』と、寂しそうにささやかれたこともあったと河上さんの死の床に悄然と侍った私の教える斎藤栄治君が述懐した」（一一五ページ）とかのくだりがその例である。こうして本書は、その全体を通じて、河上肇の人物像を生き生きとえがき出している。

河上肇と長くまじわり、その人間性にじかにふれた体験をもつ人々の数が年とともに減ってゆくのはまことに悲しい。林氏もいまは病の床にあるとのこと、氏のさらなる御長寿を心からねがわずにはいられない。

以上を以て「『全集』以後」を閉じる。次号の会報からは、河上肇について書かれた最近の文献のリストを、会員諸氏の御協力をえて連載してゆくことにしたい。とくにローカルな新聞・雑誌にのった河上論などについての情報を事務局または私あてにお寄せくださることを期待している。

一九九〇年一一月六日。

河上肇と私

飯沼辰雄

事務局より標題での原稿を求められて、私のような者がおこがましいと思いましたが、勧められるままとまどいながら書かせていただきます。

私は、昭和三年山形県に近い北越後の農家に生れた。生家に悲運が続き、小学校卒の私は師範学校に入って教員になるようにと、親類の者から説得されていたが、父母の苦境を少しでも和らげたい一心から、農作業や山林労働に明け暮れていた。二四才のとき、苦学をしようと縁故先を頼って京都にきた。独学して文部省の大学入学資格検定に合格、入学した立命館の新入生歓迎講演をきいて驚いた。「天野が、阿部（安倍？）が和辻があんなもの……。」講師は愛読する著書の大先生達を槍玉にあげてボロクソにいっているが、何故そうなのかの論理的説明はなにもなかった。大学教授とはこんなものか、えらいところへ虎の子をとられた、と思った。入学手続で苦労して貯めた金を差し出したとき、紙屑のように無雑作に取扱った窓口係の態度としぐさが思い出された。その立命館で「河上祭」の立看板をみて、河上肇の名を始めて知った。その人は、末川先生の有縁の人であることも若い学友から知らされた。しかしその頃、こんな苦学生には河上肇にはなんの関心もなかった。

いつ頃だったか、近衛公が京都帝大にきたのは米田庄太郎・河上肇がいたからだ、ということを何かで知った。米田氏の名前は、生家の土蔵の書棚にあった輓近社会思想の研究の書名とともに記憶にあった。それから河上博士の著書に親しんだように思う。昭和三九年筑摩書房から河上肇著作集が発刊になり、講読するようになった。第一回の配本は自叙伝であった。平明達意な彫琢された素晴らしい文章に感嘆した。読み進むにしたがって、その類い稀な人格に引きこまれることになった。それは、

博士が名利に一片の顧慮をも払わず心性において真に高貴であるためには、何を目標に努力しなければならないかを徹底的に追求し続けた求道者であったこと。また専制政治下において、刻苦励精して遂りついた経済学説の絶対の真理性を信じ、あるべき社会への変革促進のために自らの学説の実践活動に一身を捧げつくす理想主義者であって、そのために官憲に追われ国家権力によりかっての帝国大学勅任教授が糞便の臭気漂う獄舎に繋がれて転向を迫られても権力に媚びず、「私はたとひ火にあぶられるともその所信を曲げがたく感じてゐる」ところを守り抜いた誠実・努力・信念の人であったことに深い感動を覚えたからである。

さて、このような博士が二十年の研鑽をへて何故にマルクス経済学にたどりつき、そこに真理性を認め続けることになったのであろうか、これが私の抱く疑問である。私は年少独学をしていた頃から今日まで、マルキシズムに対し次のような素朴な疑問を持ち続けてきた。唯物史観は、社会の上部構造はその下部構造たる社会経済の動きによって必然的にきまる、としているが、上部構造である法や国家の変革をもたらす力は、政治に働きかける理念の力ではないのか、経済の動きは政治に働きかける理念が生ずる契機であり、土壌であって、社会経済の動きという純粋に物質的な生産力、生産関係そのものが、直接に必然的に国家や法を動かす原動力となる、とはいえないと思うからである。

おこがましい不遜な憶測ではあるが、貧乏物語等に示されている博士の経世家的資質、無我愛運動にのめり込んでいった頃の宗教的体験に根ざす天下の公器としての自覚、ブルジョア経済学説ではいかんとも救いようがなかった無産の労働者に対する慈悲心などが、不変の宗教的真理を信ずる博士をマルクス経済学者にさせたのではあるまいか、と思うのである。ともあれ博士の高潔な人格を思うとき、省みて己の卑小さをまことになさけ無く思う。

記念会に参加させて頂いて

一幡一雄

河上肇記念会に此の度（平成二年）初めて妻と二人でお世話になりました。

私は戦中に代表的な政党政治家で反軍演説として名高い、斎藤隆夫先生の出身地で生まれたため、同氏のお人柄を身近に偲び、いつも感銘を受けておりました。

そんな中で戦後のすさんだ日本の世情に、河上肇先生の昭和二十一年（月曜書房発行）、「思ひ出」、昭和二十四年（世界評論社）から出た「河上肇自叙伝」を買い求め読んで大いに感激致しました。その後「貧乏物語」とか「河上肇全集」、関係諸氏の著書等々の本を求め蔵書として時々書棚より取り出しては、反復私の理解出来得る範囲内で読んでいます。斎藤隆夫先生と共通な明治生れの気骨で、偉い、なかなか誰にもできることが出来ない信念がある政治家と思想家学者で、共にいまの時代若い人々に教えを受けることが多大にあると思ひます。

河上肇記念会を知ったのは河上肇没後四〇周年、同全集完結記念のつどい、が大阪梅田第一生命ビル好文倶楽部ホールで開かれたとき朝日新聞で見て参加させて頂き、その後友人のお口添で記念会にお世話になっています。

京都を訪れた時々鹿ヶ谷法然院にあるお墓にお参りさせて頂き歌碑の前で経済学者文学者思想家としてあらゆる面でひたむきに社会を生きぬかれた先生を偲び、著書を通じ私の勝手ながら本当に身近に感じさせられます。同時に現代社会に生き残っている世代の一員として学び教えられる事が多く感慨無量です。

河上肇先生を知って戦後四〇余年、今会社を定年退職やっと自己の時間が持てる様になったので蔵書としている先生の本を時間をかけてゆっくり読みこんだり、こんごは記念会に毎年参加させて頂いて会の皆様から、河上先生の戦中家族と共に苦難な道を進んでこられた中に強

い信念とするどいなかにも、やさしい心をもち続けられたお人柄、学者河上肇の足跡をもっと深く正確に学び若い世代の人々に正しく語り伝えたいと思っています。

この度記念会に参加させて頂き先生の志を偲び将来未来に向って進んでゆく集いの会として色々と学ばせて頂ける指針となったことで本当に感謝しております。

人間にとって大切なもの

吉田　千代子

夫が治安維持法という希代の悪法で学問の自由も行動の自由も、そして尊い命が奪われました。例外なく拷問の獄中生活から闘病生活と、三十代での短い生涯でした。そのような結婚生活でしたが、半身としての生活には多くのことを遺してくれました。亡くなった日は一九四四年三月十七日。敗戦も予期してのことでした。

彼の遺したものはすべて無形のものですから、私はその人間性をどうしても追いたくてなりませんでした。間もなくやって来た敗戦です。遺影に向って私はこれからの生き方を必死で考える時が来た。そうだ！、彼の分までーと意気高く全身をゆさぶる思いでした。

それは日々に高まる十五年戦争の犠牲に対するさまざまな怒りの高揚と自覚の意志表示を目のあたりにしてのことでした。

しかし私たちは、長い特高の厳しい監視の中での闘病生活であったし、ただひたすらに彼の大らかなはぐくみを信じながらの私でしたから、心棒を失った気分を、どこでどうして克服するかという壁は厚かったのです。

この壁を破ることは、自分自身が社会の動きについて知るという力をつける以外にないということでした。なぜこうなったのか、どうすることが必要で望ましいのか！切実な課題でした。このことを少しづつ判断できる条件は、日々に手にすることが可能になった出版物でした。次々と現われはじめました。読むことも、書くことも肝

心なことは何一つ話すことすらできずにきた十数年の長い苦しい沈黙であったことを思うとそれは眩い出来事でした。彼と一緒にこの日を迎えられたらどんな会話があっただろうか。読む自由のない苦しさの日々が浮かんでくるとき、私はそれらが勿体なくて、何はさておき、読もうと思うものを手当り次第読むことにした。彼の行為が自分に移ったかの様な思いで本屋あさりが楽しくて心がはずんでいました。

そんな私の中にとび込んできたうちの一冊に河上肇著「貧乏物語」がありました。一九四七年九月発行で紙は勿論仙花紙ですが、今でもその時の納得はとても大事でなりません。次の一節には特に太い線が引いてあります。

「……人間にとって大切なものはおよそ三つある。その一つは肉体（ボディ）であり、その二は知能（マインド）であり、その三は霊魂（スピリット）である。……人間の理想的生活といえば、ひっきょうこれら三つのものをば健全に維持し発育させて行くことにほかならぬ。たとえばからだはいかに丈夫でも、あたまが鈍くては困る。またからだもよし、あたまもよいが人格がいかにも劣等だというのでも困る。されば……これら三つのものの自然的発達をば維持して行くがため、言い換えれば人々の天分に応じてこれら三つのものをのびるところまでのびさして行くがため、必要なだけの物資を得ておらぬ者があれば、それらの者はすべてこれを貧乏人と称すべきである。しかし知能（マインド）とか霊魂（スピリット）とかいうものは、すべて無形のもので、からだのように物さしで長さを計ったり、衡で目方を量ったりすることのできぬものであるから、実際に当って貧民の調査などする場合には……それが私のいう第三の意味の貧乏人である。……」と。その後の著書「第二貧乏物語」も、私には大変理解し易い本の出会いでした。その中の一節「……私の如き齢とれるものをも、苟くも当人が自分に正直であらうとする限り、マルクス主義の旗のもとに引きずり込まずにはおかない。……」と弁証法的唯物論の視点に立った科学的社会主義の見地を説く現代社会の行動の物語でした。

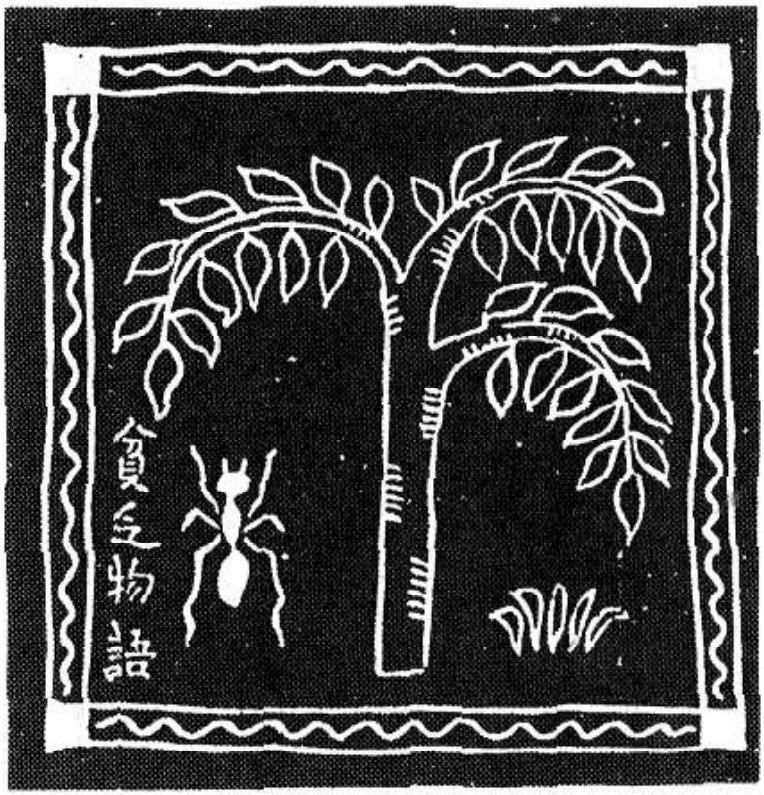
それから四十年が過ぎ、経済大国という日本が、三つの提言のバランスは極度の変形をともない、高度という内容は、人間性侵蝕の事態となり、大人も子どもも「安定」の逆を行く生活を余儀なくされています。

人間にとって大切なものは何かというこの本にしめした先生の視点を、いま静かに思いながら、如何にも納得のゆく話を目前で語りかけられている思いです。学者で

あって学者を思わせない軟らかい特徴がとても豊かなひびきで然かも、いま新鮮でなりません。今騒ぐ科学的社会主義の原典すら棚上げしても理屈をつけて生きようとする姿に対し、先生の視点はどんな論陣を展開しただろうか。

あの十五年戦争は、人間にとって大切なものを根こそぎにした弁解の余地ない残酷な最たるものでした。この歴史の教訓は、侵された日本国民は勿論のことアジアをはじめとする多くの国々……に侵す者をゆるしはしないという心根を強く持たせることでした。

言語に絶する犠牲で生れた憲法の平和的原則を崩してならない日本国民の良識は、先日の国会で廃案にした「国連平和協力法」に見たことでした。しかし侵す者は手を変え品をかえその意図を通したいでしょう。人類多数の平和の願いが土台である限りゆるせないと思います。



会員通信

（一九九〇年度総会案内に対する不参加の返事を中心にまとめました。遠方・所要は致し方ありませんが、老齢・病気・入院等の理由も多く、記念会の老齢化も心配です。療養中の会員の治癒を祈願致します。事務局で部分的に割愛もありますが御容赦下さい。順不同）

社会主義の変革が、さまざまな見地からの新しい所見を、河上のなかに発見するでしょう。盛会を祈ります。

（福岡市　荒牧　正憲）

大正十四年、本館裏の木造階段教室での、和服を召された先生の、講義のお姿が今でも鮮明に浮かんで参ります。

（京都市　岡林　事）

会員になっておるだけで諸会合に出席しないで申し訳ないと思っております。今年こそ先生の偉業を生かす年と思っております。

（長野市　加藤　孝一）

お世話さまです。当日は東京を離れられませんので失礼します。法然院の梅の実から出た芽が数十センチに伸びたのを植木鉢に入れて持参して下さった方があり、わが家で毎日眺めています。

（東京都　塩田庄兵衛）

何時も欠席勝ちで申訳ありません。本年も出席できません。会報三五号の出版を心待ちして居ます。

（和歌山県有田郡　柳淵　泰助）

イラク問題で大変なことになっています。大戦争にならない様に、イラクを改心させるように、世界の与論と経済制裁を進めねばなりません。日本政府の多国籍軍支援や自衛隊の海外派兵をゆるす国連平和協力法をつぶさねばなりません。みなさんの御協力を願います。

（京都市　寺前いわお）

事務局のお仕事感謝いたします。会報鶴首しております。

（門真市　水原　肇）

十月二十日に杉原達氏の新著「オリエントへの道」の合評会があり、その後、引き続いて、ドイツ文化・社会史学会の打ち合わせ会と例会があり、一日忙しく過ごす予定ですので、二一日は休養日とし、欠席させていただきます。

（京都市　大野　英二）

皆様の御健康を祈り上げます。河上先生のようなまじめな生き方を生涯目標にしたいものです。

（大阪市　岡田　義雄）

家内の入退院で遠出のできかねる状態です。お盛会を遠い新潟よりお祈りいたします。会報、一月以来お目にかかっておりませんが、余程不如意勝ちなる事情がおありかと推察されます。一日も早い季刊発行を念願いたします。

（豊栄市　有田惣三郎）

内外情勢のめまぐるしい今日この頃、問題の根は「経済のゆがみ」にあると思いますが、河上先生だったらどんな論理を展開するだろうか？

聞くことはできませんが、働く者一人一人の自覚が追い付き追い越すことだと言われてるような気がします。

（福島市　吉田千代子）

河上先生の過去に捉われぬ柔軟にして真摯な思考にますます学ばねばならぬ時代になって来ました。御盛会と御話の盛り上がりを祈っております。

（茨木市　大西　公哉）

戦争を知らない世代が国民の圧倒的多数を占めるようになり、また現下の学校教育などを考えるとき、新しい発想のもとに、河上先生の「人と学問」を、とくに若い世代に広く伝える事業が考えられるべきではないかと、このごろ考えています。

（横浜市　大崎平八郎）

昨年の講演会の「会報」、首を長くして待っております。お忙しいでしょうがよろしくお願いします。

（福島市　中谷　武雄）

山下先生の講演もあり出席したいのですが家からあまり離れられない状態ですので残念ながら欠席です。会報が頼りですから御苦労様ですがお願いします。鶴首しています。

（上野市　沢田　嘉夫）

（事務局からお詫び　会報発行遅滞、誠に誠に申し訳ありません。一つの組織体の事務局を担当しながらその任を果たせず、心よりお詫びいたします。事務局員個人の多忙と編集体制の不備の故です。この件に関して多くの会員から叱正と激励を受けました。また世話人代表杉原先生にもご心配をおかけしました。十月一五日に世話人・事務局会議を大門

宅で開き、打開策を検討しました。（出席　杉原・一海・大門・細川・小嶋・沖本・紀平）。編集方針に一部ちぐはぐがあるかも知れませんが、定期発行に努力いたします。御声援下さい。）

このところずっと出席できず残念です。河上先生の人と思想が一人でも多くの国民に知らされ、その志を継承する人物の起こされることを期待し、且祈ってます。

（和歌山市　竹中　章）

参加すべきところですが市議選挙前哨戦の真中につき欠席します。「講演」のカセットが出来ましたら購入させて下さい。

（松戸市　高沢　義人）

「会報」の発行が遅れているので、心配しておりました。大変でしょうが、どうかよろしくお願いします。

（鹿児島市　網屋　喜行）

県立高塚高校で教育（校門指導）の名のもとに将来ある女生徒の生命を圧殺してしまう事件が起こされました。同じ神戸市内の県立高校に身を置くものとして深く責任を痛感しています。全教の組合運動としても二度と再びあのような事件を繰り返さぬため全力をあげます。

（明石市　若林　正昭）

毎年なのですが、いつも私の学会と重なりまして……、永遠にゆかれないなと残念がっております。

（向日市　寿岳　章子）

冷戦は雪どけの模様となりましたが、中東はいつもくすぶり、日本は天皇制への回帰・保守化への動きが不気味です。反戦への不断の努力が大切でしょう。

（京都市　山崎　利一）

10・21全国統一行動が、山口県では山口県労連を中心に河上肇先生ゆかりの岩国でひらかれるため、欠席します。私はS15年に黒谷の左京区岡崎北御所町に生まれ、法然院でいつも遊んでおりました。一度、参加したいと念願しております。

（山口市　加藤　碩）

九〇年代、二一世紀まで十年、こだわるべきこと多いように思えてなりません。河上先生に学ばねばと思うこのごろです。

（京都府相楽郡　秋葉　英則）

記念会の事務所が変更になったよ

うですが、どうしたのでしょうか。まさか大門さんの御身の上に変化があったのではないでしょうか。

（伊那市　北原　邁）

（御心配をおかけして申し訳ありません。私は八五歳ですがまだまだ元気。河上肇記念会の発展の為には頑張りまっせえ……大門英太郎）

憲法九条改悪などを背景にして海外派兵の問題がクローズ・アップされております。鹿ケ谷に休まれる河上さんご夫妻はどんなおもいを致されておるかと胸が痛みます。今年は河上さんが思慕した「松陰」の生誕一六〇年で萩市では維新祭がくりひろげられました。会報を楽しみに致しております。

（防府市　上田　隆）

事務局を引き継がれた沖本事務所に敬意を表します。

（仙台市　高橋　康則）

内外激動の折、科学的社会主義の生命力に揺るぎない見通しを失われなかった先生の学問的良心に敬意を表します。

（長野県木曾郡　山下　千一）

昨年十一月、老妻と共に念願の法然院のお墓に参りました。

（熊本市　井上　栄次）

せっかく御案内状をいただき乍ら、当日は松本方面で講演の依頼を受け、既に準備がすすめられていますので、失礼の程、お許し願います。

（箕面市　黒田　了一）

ご案内をいただき、ありがとうございました。この日、岩国では安保条約廃棄・岩国基地撤去・生活と権利・平和・民主主義を守る10・21山口県総決起集会が開かれることになっており、地元受け入れ側のため、失礼させていただきます。

（岩国市　河上　荘吾）

社会主義圏の激変を河上先生はどううけ止められただろうか、など考えています。

（福岡市　伊東　勇夫）

適切な講演ですので、その詳細を是非会報にお願いいたします。

（御所市　東川　宗弘）

社会主義・共産主義思想が大ゆれにゆれているいま、河上先生の思想の過程をふり返ることは重要だと思います。

（東京都　高沢　寅人）

社会主義は思想・原理としては活きていくであろうが、体制としては資源が枯渇して「共貧社会」にならざるを得ないときに復活しても、それ以外は永久に失われた幻想に終わるであろう。しかし社会主義を深く知らずしては、その功罪も深くは理解できない。その意味で小生にとって河上先生はやはり学恩深き恩師である。殊に「宗教と科学の統一的理解」という先生の生涯の課題は小生にとっても終生の課題である。

（国分市　**佐藤　克己**）

出張の折、お墓参りを一つの仕事（？）のように思っております。総会は一度も出席出来ず残念ですが、まだ機会はあると思って当面の仕事に励んでおります。

（福岡市　**阿波　保喬**）

今こそ、社会主義の原点に立つ時。

（水戸市　**河原井忠男**）

朝鮮民主主義人民共和国との間で国交正常化の兆がある一方、自衛隊海外派兵の論議が交わされるなど気のおけない最近です。

（高山市　**池之端甚衛**）

法然院での法要・墓前祭、一度は出席しようかと思いながら果たせないでおります。東京の方も何とか頑張っていきたいと思っております。

（東京都　**住谷　一彦**）

私は戦後まもなく出た自叙伝を読み、はじめて最も正しい生き方を学びました。生涯の幸せと思っております。その後、法然院にお参りし、名刺を入れておきました関係で会員にさせて戴きました。税理士をしておりますが、今回、沖本税理士というすぐれた方の存在を知り、うれしく思っております。

（東京都　**渡辺　達也**）

大学時代の「河上まんじゅう」などの想い出から、毎年若干のカンパをさせてもらっていますが、必ずしも会員でない小生にまでご案内をいただき、有難うございました。

（奈良市　**繁田　実造**）

自衛隊の海外派兵のねらいや、民主政治圧殺の小選挙区制の策動をくいとめるため国会内外で頑張っています。

（吹田市　**橋本　敦**）

いつも　お報らせを頂きながら　御無礼を致し　おゆるし下さい
いま世界中を見渡し　人間社会は経

済もそして人々の心も混濁し、腐食甚だしい
そんな想いに満たされています
そのような現実のとき　最も大切な人間生活正常への基点となるべきマルクスやレーニンの考え方を古典者扱いにしてふりむきもしない。間違える。此の思いあがりはいつ迄つづくのでありませう
いろいろそんな事を想い　河上先生のような方が再び、お出まし下さいませぬかと　つくづく想うのです。
元、プロレタリア美術運動の一員
山上　嘉吉（柏市）

編集後記

○久し振りに七十ページを越す会報三十五号に続き、三十六号をお届けできることを嬉しく思います。感想・注文・その他いろいろと事務局へ御連絡いただきますとありがたいです。

○御覧いただきましたように『全集』以後」、残念ながら今回で終了です。二十五号（一九八七・二・一〇）より、四年一〇回にわたり執筆いただきました杉原四郎先生に感謝致します。ありがとうございました。今号二十七ページに書いておられます通り、先生は今後、河上肇資料の収集整理につとめられ、折りにふれて本誌にも執筆いただく予定です。御期待下さい。

またこれは事務局からのお願いでもありますが、河上肇に関する新資料やニュース等がありましたら、ぜひ事務局あるいは先生宅にお知らせ下さい。

杉原四郎　郵便番号　六六二一
西宮市宮西町四ー一九

○とは言え会報に連載物がないのはいかにも寂びしいことです。事務局で相談し、一海知義先生にお願いしましたところ、この度、快諾を得ました。「河上肇詩注余話」の題目で、次号よりお願いしております。御期待下さい。なお御承知と思いますが、これは先生の著書「河上肇詩注」（一九七七年刊、岩波新書）のその後あれこれということでしょうか。

○この数年、懸案でありました「河上肇記念会会員名簿」の発行を検討中です。次号あるいは次々号で御協力をお願いすることになろうかと思います。事務局財政面もありますので、会費納入方よろしくお願い致します。

○次号三十七号は順調に運べば四月下旬にお届けできるのではないかと、事務局は努力致します。

（当番　紀平龍雄）

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十五年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

会報（回覧雑誌）

会費 3000円

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は事務局へご一報下さい。

〒571　大阪府門真市元町二―二四
沖本彰税理士事務所内　河上肇記念会
電話　（〇六）九〇六―八〇三八
振替口座　大阪　三一三一九五

貧乏物語　初版